

グローバル化とアフリカの王位

— 在日イボ人と移民王制 —

松 本 尚 之*

はじめに

「路上の王：ドイツで整備工として働くアフリカの君主」

セーファス・バンサは、ガーナとトーゴの200万人以上の人民を治めている。しかし彼はまた、スカイプを用いて人民を統治する傍ら、ドイツで整備工として働いている。67歳となる彼は、1970年にドイツに移り住み、2000年に妻、ガブリエレと結婚した……

— Daily Mail Online (2016/4/7)

上記の抜粋は、イギリスのタブロイド紙が2016年に公開したウェブ記事である。記事においては、アフリカのとある民族の王でありながらも、ドイツで整備工として働く男性が取り上げられている。きらびやかな民族衣装をまとった姿と、整備工として働く姿のコントラストが描かれるとともに、ドイツ人の妻と子どもたち、故郷であるガーナへの支援活動などが紹介されている。類似した記事は、他にもある。動画サイト、YouTubeには、ニューヨークに本拠を置く映像制作会社による「カナダに暮らす西アフリカの王」と題した短編ドキュメンタリーが公開されている (Great Big Story 2017/1/11)。この動画においては、ガーナの「部族の首長」でありながらも、カナダで庭師として働く男性が紹介されている。王あるいは首

長としての出で立ちと庭師としての姿、雇用者のカナダ人女性との交流や、故郷への支援活動など、語られる内容は酷似している。

本稿は、これらの記事の内容についてその真偽を問うつもりはない。むしろ、二つの記事をもとに確認したいのは、アフリカの王や首長がある種の文化資本と見なされ、大陸を越えグローバルに消費、流通している現状である。伝統的権威者たちが、アフリカの文化を表象する象徴財として扱われているのである。

アフリカをフィールドとした文化人類学的研究において、王制や首長制は、長らく近代国家を相対化する存在として扱われてきた。伝統王国は、「歴史のない大陸」や「文明のない大陸」と呼ばれたアフリカにおいて、ヨーロッパ中心主義的な国家観におさまらない、オルタナティブな政体として注目を集めてきた。しかし1990年代になると、国家と王制・首長制の関係が、異なる視点で論じられるようになった。近代国家に包摂された伝統的権威者たちが、国家行政のなかで果たす役割が議論されるようになったのである (van Rouveroy van Nieuwaal & van Dijk, eds. 1999)。今日のアフリカの様々な国では、政府が諸民族の王や首長を保護し、地方行政と関わる一定の権限を委ねる動きが顕著となっている。人民主権を謳う民主国家と、君主制を柱とする様々な政体が並び立つ状況が見られるのである (van Rouveroy van Nieuwaal 1996; Oomen 2005; Logan 2009)。これらの議論が王や首長たちと近代国家の関係に注視

* 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授

するのに対し、冒頭の事例は、アフリカの伝統的権威者たちが持つ価値が、今日ではもはやアフリカの政治社会的文脈にとどまらず、大陸を越えグローバルに展開している可能性を示唆するものである。

以上をふまえ、本論文では、アフリカの王制や首長制が、伝統社会や近代国家の文脈を越えて果たす役割について考察する。そのための題材として、日本に暮らすナイジェリア出身のイボ人たちを事例とし、移民たちが移住先の都市において故郷の王制を模した移民組織を創造する動きを取り上げる。

ナイジェリアには300以上の民族が共生していると言われている。なかでもハウサ人、ヨルバ人、イボ人が三大民族という位置づけにある。これら三大民族のうちイボ人は、経済活動を目的とした移動に積極的なことで知られている。故郷を離れて暮らすイボ人移民たちの間で、長きにわたり相互扶助活動において中心的な役割を果たしてきたのは、故郷を同じくする者たちが集う大小様々な同郷団体である (Smock 1971)。ナイジェリア国内では、1910年代半ばには同郷団体の設立がみられ (Ahanotu 1982: 156)、現在では世界各地にまで広がっている。しかし1980年代になると、各地のイボ人移民コミュニティにおいて、王制を媒介とした新しいタイプの移民組織が設立されるようになった。それぞれの都市で暮らすイボ人移民たちが集まり、「エゼ・イボ」(*Eze Igbo*、イボ人の王の意味)と呼ばれる権威者を選ぶ現象が広まっていったのである (Osaghae 1994)。

エゼ・イボは、イボ人移民が多く集まる都市や州を単位として選ばれ、その支持者たちはエゼ・イボを同地に居住するイボ人たちの王として認識している。エゼ・イボは、自らの支持者のなかから首長を任じ、彼らとともに評議会を組織している。いわば王位を媒体とした移民組織である。本稿ではこの種の制度を指して「移民王制」と呼ぶこととする。

以下では、はじめに第1節において、アフリカ出身の移民たちと王位・首長位との関わりについて論じる。つづく第2節では、ナイジェリアから日本へと渡る移民たちの国際移動の状況について

概括する。そのうえで、第3節において、在日イボ人たちによる移民王制創造の動きを取り上げる。事例としては、「日本の王」および「大阪の王」を称する二人の人物について注目する。それら記述をもとに、最後に移民王制の創造が、移民たちの移住先での生活や故郷との関係に与える影響について考察したい。

なお、イボ人移民が移住先の地に創造した王位については、「エゼ・イボ」や「エゼ・ンディボ」(ンディボ、*Ndigbo* はイボの複数形) という名称が用いられることが多い。ただし、本論文で取り上げる日本や香港などの一部地域では、「イグウェ」(*Igwe*) という呼称が使われている。「イグウェ」は「エゼ」とともに、イボ語で「王」を意味する言葉である。特にイボランド北部を中心に、移民たちの故郷においても伝統的権威者を指し示す言葉として用いられている。本論文では、故郷の伝統的権威者と移民たちのそれとの混同を避けるため、移民たちが創造した王位については、個別事例を除き、一貫して「エゼ・イボ」という名称を用いることとする。

1. アフリカの王位・首長位と国際移民

アフリカ諸社会出身の移民たちの多くは、異境の地で一定の成功を収めると、「故郷に錦を飾る」ことを欲する。そのため、故郷の人々の求めに応じて経済的な支援を行う者は少なくない。彼らが行う経済的な支援は、親族を対象としたものに限定されず、コミュニティの自助計画への寄付行為なども含まれる (Trager 2001)。そうした移民たちと故郷の間のつながりを象徴する現象の一つが、首長や貴族の称号を求める移民たちの動きである。

現在、アフリカの様々な社会で、コミュニティの功労者に首長や貴族の称号を授与する習慣が広く普及している (Vaughan 1991; 野元 2005: 248-252)。授与の対象は、コミュニティの出身者に限定されない。コミュニティの発展に対し顕著な貢献があれば、出身や居住地に関わらず称号を手にすることができる。例えば和崎 (2001) はカメルーンのパムン王国を取りあげた研究のなかで、王制と関わる称号が移民組織の在り方に影響を及

ぼし、伝統王国の領域外へと社会関係を拡張する役割を果たしていることを明らかにした。アフリカからの国際移動については、移民たちの経済的な支援がアフリカの開発にもたらす恩恵に注目が集まっている。移民によるサハラ以南アフリカ諸国への送金額は、2010年の時点でおおよそ200億ドルに上るとされており、公的援助の三分の二の金額にまで達している (Ratha et al. 2011: 49-51)。首長や貴族の称号授与は、十分な経済資源を持たないコミュニティが、支援者たちとの間に関係を構築し、強化するための重要な手段の一つとなっている (松本 2008、2016)。本論冒頭で紹介したドイツ在住のバンサ氏についても、厳密には王ではなく、故郷への貢献を通して首長となった者の一人であると言われている。

イボ社会の場合、伝統的権威者が授与する権限を持つ首長位の称号がそれに当たる。首長位の称号は、コミュニティの発展に多大な貢献をなした者に贈られる栄誉の証である。成功を収めたイボ人移民たちのなかには、称号を手にし、首長となることを望む者が少なからず存在する。首長となることを欲する移民たちは、自分自身の故郷や、何らかのつながりを持つ他のコミュニティに対し支援を行うことで、称号を手にする¹⁾。

この様な移民たちによる首長位の称号の獲得は、故郷の既存のコミュニティとの関係のうえに成立する習慣である。それに対し、移民王制は、故郷を離れた移民たちが、移住先の地に新しい王制・首長制を創造する試みである。

ナイジェリアでは、移民王制が植民地時代から存在した。例えば、A. コーエン (Cohen 1969) は、ナイジェリア南西部の都市イバダンの「ハウサ人の首長」(*Sarkin Hausawa*) について報告している。「ハウサ人の首長」は、植民地政府の承認を得たハウサ人居住区の代表であり、イバダンのヨルバ人王であるオルバダンが指名し、儀礼を経てその地位に就いた。ハウサ人居住区は、植民地政府が設置した移民居住区であり、「ハウサ人の首長」は植民地政府の後ろ盾を得て選ばれた権威者である。しかし、コーエンは、その創造過程にハウサ人自身が主体的に関与し、長距離交易の独占という政治経済的な目的にその制度を活用し

ている様を描き出した。

またイボ人による移民王制を扱った先行研究として、1990年代前半に北部のカノで調査を行った E. オサガエ (Osaghae 1994, 1998) の研究がある。彼は、移民王制の創造を故郷の伝統的権威者制度の影響としてよりも、北部の集権的な宗教政治体制に対する適応として捉えている。さらに、カノの移民たちが、植民地時代に設置された旧移民居住区に集住していることや、人口規模が小さく単一の同郷団体を組織していることも、移民たちの意見の集約を容易とし、単一の権威者の創造を可能としたと指摘している。

移民たちによる故郷の称号の獲得は、移民たちと、彼らが王や首長となるコミュニティの間につながりを構築、強化する。それに対し、移民王制は、故郷の政治制度と実質的な関係を持たず、必ずしも故郷の権威から正統性を付与されているわけではない。イバダンの「ハウサ人の王」やカノの「イボ人の王」を権威づけるのは故郷の権威者ではなく、移住先の都市に暮らす移民たちであり、その地を統治する権威者 (ホスト社会の王や植民地行政機関) である。

本稿で取り上げるエゼ・イボの場合をみれば、植民地化以前から王制文化、首長制文化を保持したハウサ人やヨルバ人とは異なり、イボ社会では王位や首長位そのものが、植民地政策や国家政策との関わりから生まれた比較的新しい権威者の地位である (松本 2008)。王位や首長位は今日のイボ社会に深く浸透し、その地位に対する人々の関心は非常に高い。そして高い関心の結果、各地のイボ人移民社会が故郷の王制を模倣して創造したのが、エゼ・イボの地位である。だがその一方で、移民たちが生み出したこの新しい王制については、故郷の人々から厳しい批判の声が上がっている。特に、故郷の伝統的権威者のなかには、エゼ・イボを「イボ文化の粗悪化」(*bastardization of Igbo culture*) と評し、その廃止を求める動きもあった。エゼ・イボの地位にある者は、移住先の地においては「王」と呼ばれる一方で、故郷の地においてはエゼに従属する存在である。結果として、移民王制は移民たちと彼らの故郷の間に摩擦を生み出すのである (松本 2012)。

2. ナイジェリアから日本へ

アフリカを起点とした人の移動の流れは、現在では日本を含めた東アジアにまで到達している。今日、日本に暮らすアフリカ地域出身者の数は、非正規滞在者を含め、およそ2万人と言われている。そのなかで、ナイジェリア人は出身国別人口において第1位となっている。

『在留外国人統計』(旧『登録外国人統計』)によれば、日本に暮らすナイジェリア人の数は、1990年代に入り急増した。正規の在留資格を持ち日本に滞在するナイジェリア人の数は、1984年末の時点ではわずか44人であった。それが2011年には2730人にまで増加している(入管協会編 1985-2012)。日本政府は長らく単純労働を目的とした就労ビザの発給は認めて来なかった。また仮に専門的な知識や技術を持っていたとしても、言葉の壁や差別によってナイジェリア人たちがそれらの業種に就く機会は極めて限定されている。そのため、ナイジェリア人の多くは、短期滞在ビザで入国し、その有効期限が切れた後も非正規に就労を続ける。しかし、時とともに、彼らのなかにもより安定した地位で日本に滞在する者が登場してきている。2011年末の時点では、正規の滞在許可を持つ在日ナイジェリア人の46.8%にあたる1,277人が永住権を取得しており、加えて25.7%にあたる702人が配偶者ビザを所持している。10年以上日本で暮らしており、日本人女性を妻とし、高校や大学に通う子を持つナイジェリア人も少なくない(松本 2014)。

イボ人は、これら在日ナイジェリア人の多数派を占めている。王位や首長位に対する関心は、日本に暮らすイボ人たちの間でも見られる。イボ人移民が組織する同郷団体のリーダーたちのなかには、首長位の称号を持つ者も多い。イボ人移民たちやその同郷団体が何らかのイベントを開催する際には、必ず来賓席が用意される。そして行事の初めには、来場した有力者たちの名前を肩書きとともに呼び、来賓席へと案内する。首長位の称号を持つ者は必ずそれら有力者の一人として扱われ、来賓として遇されることとなる。

3. 日本における移民王制の創造

エゼ・イボは、イボ人移民が多く集まる都市や州を単位として選ばれる。その地位に就いた者は、「ラゴスのエゼ・イボ」(*Eze Igbo, Lagos*)や「カノのエゼ・イボ」(*Eze Igbo, Kano*)のように都市や州の名前とともに自らを「イボ人の王」と称する。

イボ人移民コミュニティにおけるエゼ・イボの地位の創造は、もともとは1980年代後半にナイジェリア北部の都市で始まったと言われている。さらに1990年代後半には、ラゴス州やオヨ州、リバース州やクロス・リバー州、エド州など南部の各州にも拡大していった(Osaghae 1994)。今日ではエゼ・イボの地位は、ナイジェリア国内に限らず国外のイボ人移民コミュニティにも見られる。東アジアの場合、香港に暮らすイボ人たちの「王」として、「香港のイグウェ」(*Igwe, Hong-Kong*)が存在する。

日本では、2006年にある裕福なイボ人移民が「日本のエゼ・イボ」(*Eze Igbo, Japan*)に名乗りを上げた。だが、十分な支持者を集めることができず、その後議論は立ち消えとなっていた。しかし、2010年代になると、首都圏および大阪において、相次いで移民王制が創造された。前者は、「イグウェ・ジャパン」すなわち「日本の王」を、後者は「イグウェ・オオサカ」すなわち「大阪の王」を名乗っている。以下では、二人の王やその支持者へのインタビューをもとに、在日イボ人による移民王制創造の過程を論じたい。特に、彼らが考える王となる条件や、戴冠に至る経緯に注目する。

事例：日本の王、*Igwe Japan*

現在、「イグウェ・ジャパン」を称するのは、アナンブラ州出身で埼玉県在住のCU氏である。彼の戴冠式は、2015年7月に彼の自宅で行われた。後述する通り、彼が「日本の王」を名乗ることについては、異議を唱える者も多い。

CU氏が来日したのは2003年のことである。もともと、自動車の中古部品の買い付けを目的として来訪したが、思うように商品が集まらず、結果

として日本に留まることとなった。当初は、レストランや工場で働いていたが、それまで貯めた資金を元手に2007年に起業した。現在は、日本人の妻とともに、リサイクル／リユース業を営んでいる。埼玉郊外に事務所を兼ねた置き場を持つ他、札幌にも支店を構えている。

CU氏の祖父は、故郷のコミュニティの伝統的権威者であった。そのため、CU氏は自身は「ロイヤルファミリー」の出身であると称している。来日した彼は、日本にはイグウェを称する者がいないことに気づいたという。経済的な成功を収めた古参の移民たちの多くは、故郷の首長になろうとはするものの、日本のイグウェとなることは考えていないようだった。そのため、CU氏は自身がイグウェとなることを意識し始めたという。

CU氏によれば、イグウェとなるには、いくつか条件がある。

第一に、出自と関わる条件が挙げられる。CU氏によれば、イグウェとなる者は、「ロイヤルファミリー」の一員であるか、あるいはオゾと呼ばれる伝統的な称号の保有者でなくてはならない。植民地化以前のイボ社会には、有力者の証として様々な称号制度が存在した。称号のなかには、広い地域に普及しているものもあり、そうした称号を手にすることで人々は村落を越えた名声を手にすることができた。オゾは、イボ社会で最も有名な称号制度であり、イボランド北部を中心に広く普及していた。現在では一般に「首長」と言えば、イボ社会では、伝統的権威者から首長位の称号を授与された人々を指す。しかし、オゾの称号制度が普及した地域では、この称号を持つ者に対しても「首長」という呼称が用いられる。イボランドのなかでも植民地化以前から王国を形成していたオニチャでは、オゾの称号を有することが、王の地位につく前提条件となっていた（Henderson 1972: 297-299）。

ただし、オゾの称号はイボランド全土に普及した称号制度ではない。イボランドの南部や東部にはオゾの称号が存在しないコミュニティも多々ある。したがって、イボ人移民たち全てが、オゾの称号を持つことをイグウェの前提条件と考えているわけではない。

イグウェになるための第二の条件として、CU氏は、安定した経済的基盤を持つことを挙げている。多くのイボ人たちが、伝統的権威者に必要な資質として、コミュニティの自助活動に熱心な篤志家であることを挙げる。様々な支援活動を行う前提として、伝統的権威者となる者には、一定の経済的な基盤が求められる。

CU氏の支持者たちは、彼を「イグウェ・ジャパン」とともに、「イグウェ・アラナズンワ」と呼んでいる。「アラナズンワ」(*Aranazunwa*)とはイボ語で「子どもを育てる乳房」を意味する。CU氏は、イボ人移民たちが寄付集めを目的として催す様々な機会に、多額の寄付を行う者の一人である。彼の支持者たちのなかには、CU氏がイグウェとなる以前から、彼を「アラナズンワ」と呼ぶ者たちがいたという。

さらに第三の条件として、借家暮らしではなく、一戸建ての住宅を所有することの重要性を指摘する。イボ社会において伝統的権威者たちは、来客を接見し、コミュニティの問題を裁決するための場所、いわゆる「パレス」を持っている。CU氏は、イグウェを称するにあたってパレスを持つことを必要不可欠の条件と考えている。

この点は、イボ人移民たちの慣習を考えると興味深い。なぜなら、「故郷に錦を飾る」ために移民たちが第一に取り組むのが、故郷の地に自宅を建設することだからである。イボランドの村落内を散策していると、一般的な平屋の住宅に混ざって、立派な門構えの、2、3階建ての豪邸に出くわすことがある。これら豪邸は、ナイジェリア国内外の都市部に暮らす移民たちが、故郷に建てた住居である。住居は普段は使われることなく閉ざされており、移民たちがまれに帰省した折に用いられる。また、実際に果たされるかは別として、移民たちは故郷の家を引退後に戻るべき、「終の棲家」と考えている。彼らは移住先の地で借家住まいを続けつつ、資金をためて故郷に家を建設するのである。したがって、通常、移民たちが移住先の地に自宅を構えるのは、故郷に家を建てた後のことである。この習慣に従うなら、第三の条件については、よほど裕福な者でない限り達成は難しいように思われる。

それに対し、CU氏は、故郷よりも先に移住先の日本に自宅を建設した、イボ人移民たちのなかでは極めて珍しい存在である。彼の自宅は埼玉県H市に位置し、木造の一般住宅が立ち並ぶなかで、ナイジェリアの住宅を意識した洋風建築となっている。住宅内には、人々を接見するための居間があり、その一角にはイグウェの地位を象徴する玉座がおかれている。彼は、ナイジェリアの旧首都ラゴスに部屋を借りているが、自宅は未だ建てていない。

2015年7月、CU氏は、自宅の新築祝いを兼ねてイグウェ・ジャパンの戴冠式を開催した。戴冠式にあたっては、アナンブラ州から伝統的権威者の一人を招き、戴冠の証人としたという。さらに戴冠式では、イボ人移民の年長者の一人が、CU氏にイグウェの地位を象徴する冠を被せた。

ただし、イボ人移民たちのなかには、CU氏がイグウェ・ジャパンと称することに対し、異議を唱える者が多い。CU氏の戴冠式には、関東在住のイボ人たちのなかでも、同郷団体の指導者や有力者が集まった。しかし、彼ら参列者のなかには、新築祝いに出席したのであり戴冠式が行われるとは知らなかった、と主張する者たちもいる。批判者のなかには、「日本」や「関東」はイグウェを選ぶ単位としては広すぎ、CU氏は「埼玉の王」を名乗るべきという意見もある。あるいは、イグウェではなく、首長と呼ぶべきという者もいる。

事例：大阪の王、Igwe Osaka

一方、「イグウェ・オオサカ」、すなわち「大阪の王」を称するのは、アナンブラ州出身で兵庫県在住のVO氏である。

VO氏は、日本でナイジェリア出身者が急増した1991年に来日した。1年間東京で過ごした後、失職をきっかけに大阪に来ることに決めた。当時、大阪はアフリカ人には住みづらい街と噂されており、周囲には大阪行きを反対されたという。

VO氏によれば、彼は大阪に来た最初のナイジェリア人の一人である。彼は、現在の関西ナイジェリア連合会(Nigeria Union, Kansai)の発起人だという。1994年に、VO氏は自宅にナイジェリ

ア人を集め、親睦を目的とした定例会を開くようになった。当初は5、6人が集まったという。その後、関西に住むナイジェリア出身者の数は増加し、関西ナイジェリア連合会の定例会も、区民会館の一室を借りて行うようになった。さらに2004年3月には、関西在住のイボ人をメンバーとする同郷団体、関西イボ人連合会(Igbo Union, Kansai)が設立された。

2009年、関西イボ人連合会のメンバーは、VO氏をイグウェ・オオサカに指名した。イグウェに選んだ理由について支持者たちは、彼が関西のイボ人たちのなかでは「年長者」の立場にあったことを第一に挙げる。VO氏は、関西に暮らすイボ人たちのなかで、特に経済的に秀でているわけではない。現在住んでいる住居も借家である。人々は、経済的な背景よりも、むしろ関西では古参のナイジェリア出身者として、これまで彼がイボ人たちのなかで行ってきた支援を指摘する。日本人と結婚し、正規の在留許可を持つことから、新参のイボ人たちの保証人となることがしばしばあった。また、初歩的な日本語が話せ、ひらがなやカタカナが読めることから、日本人との交渉において頼られることもあった。関西在住のイボ人が何か警察との間にトラブルを抱えた時には、その交渉役も務めた。

イグウェ・オオサカの戴冠式は、2009年11月に行われた。式には、ナイジェリア大使の代理として総領事も参列した。そして、関西イボ人連合会の初代会長が、人々を代表してVO氏の頭に冠を載せた。

先述の通り、イボ社会では伝統的権威者がコミュニティの功労者に対し、首長位の称号を授与することが習慣となっている。イグウェ・オオサカも、およそ10名に首長位の称号を与えている。彼らは「大阪の首長」と称し、イグウェ・オオサカの助言役を務めている。その中には、関西イボ人連合会の歴代会長も含まれる。

首長位の称号の授与式は、2013年8月にヤムイモの収穫祭と併せて執り行われた。この祭りと授与式には、ナイジェリア大使が妻と共に出席したという。関東在住の者も含め在日イボ人の多くは、イグウェ・オオサカの戴冠式や首長位の称号授与

式に大使や総領事が参加したことは、大使館がイグウェ・オオサカの正統性を公認している証であると、考えている。

また、VO氏や、彼が首長の称号を授与した者たちのなかには、それ以前に既に出身コミュニティや関わりのあるコミュニティにおいて首長の地位にあった者たちも多い。この場合の首長とは、伝統的権威者から首長位の称号を授与した者のほか、先述したオゾの称号を持つ者も含まれる。VO氏や大阪の首長たちが、もともと故郷の首長であったことが、大阪における彼らの地位の正統性を語るうえでの根拠の一つとなっている。

関東の例と比較して、関西においてイグウェ選びが円満に進んだ理由の一つとして、関西のイボ人移民たちはコミュニティの規模の違いを挙げる。イボ人移民たちが移住先の地で設立する同郷団体において、メンバーシップの基準となる「故郷」の地理的範囲は、同地に暮らす移民人口の規模によって変化する。イボ人の人口が多い関東には、関西イボ人連合会のように、イボ人全体をまとめる同郷団体は存在しない。代わって、イボ人移民たちの相互扶助活動において中心的な役割を果たしているのは、出身州を単位として設立された同郷団体である。それら州を単位とした同郷団体のなかでも規模が大きいものになると、登録メンバーは300人を超え、毎月開催される定例会にはおよそ100人が集まる。そして、それぞれの団体には、篤志家として一定の支持者を持つ者が複数人いる。このような状況において、複数の団体をまたいで一人の人物をイグウェに選ぶ作業は、大変困難なものであろう。一方、関西には、イボ人全体の相互扶助を目的とした関西イボ人連合会が活動している。その登録メンバーは、2017年の時点で約50名で、定例会の参加者は20人程度である。イグウェの選出にあたって、関西に暮らすイボ人たちの総意をまとめることは、関東に比べれば容易であると、団体の役員は指摘する。

おわりに

日本に移民王制を創造した理由について、二人のイグウェやその支持者たちに尋ねると、多くの

者が、自分たちの子どもに故郷の文化を教えるためだと応える。イグウェ・オオサカから称号授与を受けた大阪在住の首長は以下のように述べた。

我々はここに住んでいる。いつこの地を去るかは定かでない。そして我々の子どもたちは成長している。彼らのなかにはナイジェリアに行く機会がある者もいるだろう。しかしなかにはその機会がない者もいる。そうした子どもたちは、いかにして父親の生き方を知ることができるのか。だから我々は、我々の生き方を見せることに決めた。なぜなら、我々はここにおり、ここにいないてはならないのだから。……我々は、ここで我々の文化、我々の文化と関わる組織を立ち上げることにした。

アフリカ出身の移民を扱った過去の研究においては、移民たちと彼らの故郷の間の持続的な関係が強調されてきた。しかし、移住先の地での生活が長期化するなか、移民たちと故郷、そして移住先の地との関係も徐々に変化している。

経済的な財は、それが社会的な承認を得て初めて価値を持つ。移住先の地で差別的な扱いを受けることが多い移民たちは、故郷における社会的承認を求める。しかし彼らは、故郷からの承認のみで満足するわけではない。人びとは、生活のほとんどを移住先の都市で暮らすのであり、そこは彼らの妻や子供たちが住む場所である。移民たちが、移住先の地での承認を求めることは、何ら不思議なことではない。しかし、「外国人」として日本で彼らが社会的な承認を得る機会は限定されている。ゆえに、移民たちは移民王制を創造することで、彼らが承認される場所や価値観を創出しようとするのである。

移民王制の創造によって生み出される承認の場は、イボ人移民内に限定したものではない。近代国家に包摂された伝統的権威者の位置づけを扱った研究においては、現代アフリカにおいて王や首長が影響力を持つ背景として、開発援助機関や国際NGO、あるいは多国籍企業など、外部アクターの眼差しの重要性が指摘されている (Oomen

2005; Baldwin 2016; 松本 2008)。支援や投資の前提となるガバナンス改善の指標として、国家の脱集権化や多元性の尊重が叫ばれるなか、王や首長たちは、国際社会が求める政治理念を表象する存在と見なされているのである (Comaroff & Comaroff 2018)。アフリカの伝統的権威者の地位は、アフリカの文脈を越えて価値づけられている。だからこそ、移民たちの妻や子どもを含め、移住先の地において人々から承認を得る可能性があるのである。

その意味では、二人のイグウェや彼らの首長たちの多くが、日本で王や首長となる以前から、故郷において既に称号を取得済みであったことは重要であろう。彼らが求めるのは、新しい称号そのものではなく、王や首長を遇する場であり、自身の子どもたちが自分たちの父が何者であるかを理解する価値観なのである。

注

- 1) 国際移民による首長位の称号の獲得については、在日イボ人の事例をもとに別の論文 (松本 2016) で論じている。詳細については、そちらを参照されたい。

引用文献

- Ahanotu, Austin M. (1982) "The Role of Ethnic Unions in the Development of Southern Nigeria: 1916-66", Boniface I. Obichere (ed.), *Studies in Southern Nigerian History*, Frank Cass, pp. 155-174.
- Binsbergen, Wim van (1999) "Nkoya Royal Chiefs and the Kazanga Cultural Association in Western Central Xam". E. Adriann B. van Rouveroy van Nieuwaal & Rijk van Dijk, (eds.), *African Chieftaincy in a New Socio-Political Landscape*, LIT, pp. 97-133.
- Baldwin, Kate (2016) *The Paradox of Traditional Chiefs in Democratic Africa*, Cambridge University Press.
- Comaroff, John & Jean Comaroff (2018) "Chiefs, Capital, and the State in Contemporary Africa: An Introduction", John Comaroff & Jean Comaroff (eds.), *The Politics of Custom: Chieftaincy, Capital, and the State in Contemporary Africa*, The University of Chicago Press.
- Cohen, Abner (1969) *Custom and Politics in Urban Africa: A Study of Hausa Migrants in Yoruba Towns*, University of California Press.
- Henderson, Richard N. (1972) *The King in Every Man: Evolutionary Trends in Onitsha Ibo Society and Culture*, Yale University Press.
- Logan, Carolyn (2009) "Selected chiefs, elected councilors and hybrid democrats: popular perspectives on the co-existence of democracy and traditional authority", *Journal of Modern African Studies*, 47: 101-128.
- 松本尚之 (2008) 『アフリカの王を生み出す人々：ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権制社会』 明石書店。
- 松本尚之 (2012) 「ナイジェリア・イボ社会における移民組織と王制—王位を媒体とした《つながり》の構築と断絶」 高谷紀夫、沼崎一郎編 『つながりの文化人類学』 東北大学出版会、pp. 267-295。
- 松本尚之 (2014) 「在日アフリカ人の定住化とトランスナショナルな移動—ナイジェリア出身者の経済活動を通して—」 『アフリカ研究』 85: 1-12。
- 松本尚之 (2016) 「グローバル化のなかの伝統的権威者—ナイジェリア・イボ社会における国際移民と首長位」 太田至総編集、松田素二・平野 (野元) 美佐編 『紛争をおさめる文化—不確実性とブリコラージュの実践』 京都大学学術出版会、pp. 31-55。
- 野元美佐 (2005) 『アフリカ都市の民族誌：カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』 明石書店。
- 入管協会編 (1985-2012) 『在留外国人統計』 入管協会。
- Oomen, Barbara (2005) *Chiefs in South Africa: Law, Power & Culture in the Post-Apartheid Era*. James Currey, Oxford.
- Osaghae, Eghosa E. (1994) *Trends in Migrant Political Organizations in Nigeria: The Igbo in Kano*, IFRA.
- Osaghae, Eghosa E. (1998) "Hometown Associations as Shadow States: The Case of Igbos and Yorubas in Kano", Rex Honey and Stanley Okafor (eds.), *Hometown Associations: Indigenous Knowledge and Development in Nigeria*, IT Publications, pp. 111-121.
- Ratha, Dilip, Sanket Mohapatra, Caglar Ozden, Sonia Plaza, William Shaw and Abebe Shimeles (2011) *Leveraging Migration for Africa: Remittances, Skills, and Investments*. World Bank.
- Rouveroy van Nieuwaal, E. Adriaan B. van (1996) "State and Chiefs: Are Chiefs Mere Puppets?", *Journal of Legal Pluralism*, 37-38: 39-78.
- Rouveroy van Nieuwaal, E. Adriaan B. Van & Rijk van Dijk, eds. (1999) *African Chieftaincy in a New Socio-Political Landscape*, LIT.
- Smock, Audrey C. (1971) *Ibo Politics: The Role of Ethnic Unions in Eastern Nigeria*, Cambridge, Harvard Univ. Press.
- Trager, Lillian (2001) *Yoruba Hometown: Community, Identity, and Development in Nigeria*, Lynne Rienner Publishers.
- Vaughan, Olufemi (1991) "Chieftaincy Politics and Social Relations in Nigeria", *Journal of Commonwealth & Comparative Politics*, 29: 308-326.
- 和崎春日 (2001) 「国民社会のなかのアフリカ伝統都

市：現代ネットワークのなかのバムン伝統都市性」
 嶋田義仁・松田素二・和崎春日編『アフリカの都市
 的世界』世界思想社、pp. 32-55.

ウェブサイト

Daily Mail Online（2016年4月7日）“King of the road:
 The African monarch who works as a German
 mechanic (when he's not ruling his people via Skype)”、
[http://www.dailymail.co.uk/news/article-3527951/
 King-road-African-ruler-German-mechanic-fixes-cars-
 not-ruling-people-Skype.html](http://www.dailymail.co.uk/news/article-3527951/King-road-African-ruler-German-mechanic-fixes-cars-not-ruling-people-Skype.html)、2016年10月18日閲覧。
 Great Big Story（2017年1月11日）“The West African
 King in Canada”、[https://www.youtube.com/watch?
 v=duUWshPHpIQ](https://www.youtube.com/watch?v=duUWshPHpIQ)、2019年3月20日閲覧。